

P-081

ABPC/SBTの投与回数による臨床効果の比較

高槻赤十字病院 薬剤科

○松本 弘誠、小島 一見、美和 考之、末松 由美、
荒谷 忍

【目的】βラクタム系抗生剤は時間依存的に抗菌作用を有し、投与回数を増やしてTime Above MICを長く保つことが推奨されている。しかし、投与回数が増えるほど点滴の更新など患者・看護師への負担が大きくなる傾向にある。そこで我々は、適切な投与回数とされる3回および4回投与における臨床効果を比較し、どちらの投与法が適切か検証したので報告する。

【方法】平成24年3月から平成25年2月にABPC/SBTが投与された肺炎患者79例について、1日3回投与と4回投与における投与1日目と4日目のCRP、WBC、体温の変化量より臨床効果に差がみられるかを後ろ向きに調査した。癌患者、投与日数が3日以内、他の抗菌剤からの変更例は除外した。また、肺炎球菌ワクチン接種の有無による影響についても若干の検討を加えた。

【結果】患者背景は、3回投与群58例/4回投与群21例で、肺炎が40例/11例、誤嚥性肺炎が6例/5例、COPD感染増悪が12例/5例であった。CRPの減少量は4.84/4.71(mg/dL)、WBCの減少量は3.20/4.02(千/ μ L)、体温の減少量は0.06/0.73(°C)であり、全項目において有意差はみられなかった。肺炎球菌ワクチンについては、CRPの減少量が接種群1.67/非接種群5.80(mg/dL)であり、非接種群が有意に減少した。

【考察】CRP、WBC、体温の変化量に両群間の差はみられず、患者・看護師の負担、費用対効果の面から1日3回投与の有用性が示唆された。しかし、後ろ向き調査で患者背景にばらつきがあるなどさらなる検討が必要である。肺炎球菌ワクチンにおいては、接種群の投与前CRPが非接種群より低値で、接種によりCRP上昇が抑えられていたため、効果に差がみられたと考えられる。

P-082

釧路赤十字病院におけるメロペネムの使用状況調査

釧路赤十字病院 薬剤部¹⁾、釧路赤十字病院 検査部²⁾

○高柳 昌宏¹⁾、富田 昌志¹⁾、小林 義朋²⁾、千田 泰健¹⁾

【背景】最も広域の抗菌スペクトルをもつ優れた抗菌剤であるカルバペネム系抗菌剤は、当院において使用増加傾向にある。カルバペネム系抗菌剤は特定抗菌剤として届け出制としているが適応症を限定していない。カルバペネムを他の抗菌剤にも感受性良好な起病菌による各種市中感染に対して使用するという適応症の問題がある。また、2011年3月より重症・難治例において1日3gまで使用が承認されたが有効性の評価がされていない。そこで今回、当院でのメロペネムの使用状況を調査した。

【方法】2012年4月から2013年3月までの、メロペネムを使用した126症例について検討した。

【結果】当院においてメロペネムの各菌への薬剤感受性は維持されていた。基礎疾患、原因微生物、臨床効果、細菌学的効果、投与期間等について、また当院においての問題点、今後の課題について報告する。

【考察】今後予想されるESBL産生菌の蔓延は、カルバペネム系薬の使用増加にもつながると考えられる。抗菌剤の市場が少ない現在、特にカルバペネム系抗菌剤は院内発症の各種重症感染症の患者に対して救命的治療薬として大切に使用すべきである。耐性菌の増加を防ぐため、ICT活動に貢献したい。

P-083

薬剤部での抗MRSA薬使用症例の解析業務の評価

名古屋第二赤十字病院 薬剤部

○小原 彩、浅井 敬子、伊東佐恵子、木村 純子、
小松 浩大、高木 裕介、林 恭子、佐々弥栄子、
青山 智彦

【目的】塩酸バンコマイシン（VCM）はメチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）感染症に対する治療薬だが、その薬物動態は腎機能により変動し、血中濃度が効果発現と副作用に影響する薬剤である。薬物治療モニタリング（TDM）を実施し、患者個別に最適な用法用量を設定することは病院薬剤師の必須業務の一つであり、当院薬剤部では2011年8月よりVCM使用患者に対して血中濃度測定確認とTDM解析を実施し、その導入効果について検討を行った。

【方法】TDM解析業務導入前の2010年10月から2011年3月と、TDM解析業務導入後の2012年10月から2013年3月のVCMを使用した患者を対象として、血中濃度測定率およびTDM解析による用法用量の変更推奨症例数と変更実施数について調査した。

【結果】TDM解析業務導入前後においてVCMの血中濃度測定率は76%から98%へと上昇した。TDM解析を行った66例において、VCM血中濃度の測定指示がなかった症例は18例（27%）であり、そのうち測定依頼をして実施された症例は17例（94%）であった。血中濃度測定前にTDM解析を行い、用法用量の変更を推奨した症例は12例（18%）、そのうち処方変更が行われた症例は8例（67%）であった。また、血中濃度測定後にTDM解析を行い、用法用量の変更を推奨した症例は25例（38%）、そのうち処方変更が行われた症例は19例（76%）であった。

【考察】薬剤部でのTDM解析導入後のVCM使用症例では、約半数の症例で処方変更を提案し、その約8割の症例で提案通り処方変更が行われた。また、当院のVCM使用患者の血中濃度測定率を約100%まで近づけることができた。これらより、当院におけるVCMの適正使用に貢献することができたことと考える。今後は薬剤使用期間、腎機能の変動に留意した精度の高いTDM解析を行っていくことが重要だと考える。

P-084

抗菌薬評価チーム『KUMAGUS』の活動について

日本赤十字社和歌山医療センター 薬剤部

○中山 博文、山田 和弘

【目的】従来より抗菌薬の適正使用を推進する目的から、抗MRSA薬及び広域抗菌薬等の使用に際しては届出制度が画一化されていた。しかし抗菌薬の不適切な使用による耐性菌の増加が問題となってきた。そこで院内感染対策委員会のもと、抗菌薬評価チーム（抗菌薬 Under Monitoring & Guidance Support : KUMAGUS）を立ち上げた。KUMAGUSとは感染症内科医師、薬剤師、細菌検査技師をコアスタッフとし、本センターでの届出抗菌薬（抗MRSA薬、ニューキノロン＜注射薬＞、カルバペネム）の使用状況のモニタリング及びフィードバックを実施するためのプロジェクトチームである。抗菌薬の処方内容をモニタリングし、処方医師に適正使用のフィードバックを行うことで感染症の予後を改善し、また本センターの耐性菌を減少させることを目的としている。

今回、KUMAGUS導入前後での抗菌薬使用状況と各種耐性菌の検出件数の変化及び今後の課題について報告する。

【方法】カンファレンスは週一回の開催とし、薬剤師が開催日前日に対象となる届出抗菌薬を使用している患者の過去一週間分のデータを抽出し、電子カルテによりチェックする。要チェック症例をリストアップし、当日のカンファレンスで対象抗菌薬投与の妥当性を客観的に検討した。

【結果・考察】要チェック理由として、主にトラフ値異常または未測定（特にバンコマイシン）、検体未提出、対象菌未検出、de-escalationの必要性などが挙げられた。検討結果を処方医師にフィードバックすることで抗菌薬処方に対する意識変化も窺え、適正使用に努める医師も多くみられた。またKUMAGUS導入後の抗菌薬使用量については減少傾向であったが、各種耐性菌の検出件数については現在調査中である。

今後は抗緑膿菌薬も含めたモニタリングも必要であると考えられ、更なる抗菌薬適正使用の推進に寄与していきたい。